

涅槃堂新築工事と金澤翔子さん（龍雲寺様）

浜松市西区入野町の龍雲寺様では現在涅槃堂新築工事が行われていますが、龍雲寺様からこの機会に子供たちに、大工の技術を体験してもらいたいと提案をいただき「大工さん体験会」を六月十日に開催いたしました。事前に応募した六五人の子供たちと親御さんは

- ・ 鉋削りで短冊づくり
- ・ のこぎり、げんのうで本棚づくり
- ・ 丸太切り体験
- ・ 五寸釘打ち体験
- ・ 左官屋さん体験
- ・ 木のコマ作り

を順番に体験し、どれも初めてのことで大工さんに手伝ってもらいながら楽しんでいました。一ヶ月後の七夕用に木に願い事を書き鉋で削り短冊を作りましたが、初めての鉋削りはなかなか大変だったようです。大工だけでなく左官屋さん体験では実際に鏝を使って壁を塗り、木のコマづくりは建具屋さんと一緒に作り皆で回して楽しそうでした。約半日の体験ですが、

子供たちにはこの体験を忘れずに、将来の仕事を決める時にこのことを思い出し、選択肢の一つになればと思います。職人になる希望者が少なくなっている今日この頃、このような機会を与えていただいた龍雲寺様には感謝しております。



初めての鉋削りに挑戦

また龍雲寺様の涅槃堂には、ダウン症の書家・金澤翔子さんから奉納された世界一大きい般若心経の展示がされます。奉納された般若心経は縦四m・横十六mの大きさで、三〇歳の時に一週間かけて書き上げた大作です。



メディアの取材を受ける
金澤翔子さん（左からから 2 人目）

六月二十日には金澤翔子さんが位牌堂の壁面に表装された般若心経を見るために訪れました。当日は檀家の方々が般若心経を唱えながら作品を鑑賞し、涙ぐむ檀家さんもいらっしゃいました。またテレビ局や新聞社も取材があり、夕方のニュースでもその様子が流されました。金澤翔子さんは一九八五年東京都目黒区に生まれ、五才で母親の泰子さんに師事し書道を始めました。二〇才の時に銀座で開いた個展で脚光を浴び、それ以後各地の有名な寺院やNHKの大河ドラマ「平清盛」に揮毫し、そして個展は日本だけでなく海外でも開催されています。また福島県いわき市には「金澤翔子美術館」があります。

聖眼寺様本堂耐震工事

聖眼寺様（豊橋市・真宗高田派）では今年一月から本堂耐震工事に入っております。かねてより必ずくるといふ地震に對して対策をとらなければと考へていたそうです。昨年竣工した弊社施工の光福寺様がご縁で、今回の耐震工事を請け負わせていただくことになりました。

主な工事内容としては屋根瓦の葺き替えと床を解体し、ジャッキで建物を揚げ鉄筋を組んで土間にコンクリートを打ち、腐った土台の交換、土台、梁、柱に仕口ダンパーという制震金具を取付けます。十月に完成予定で工事を進めています。



基礎工事の様子。床を解体し防湿シート敷きの上に鉄筋を組立て中

宮大工が作る須弥壇



作業所内にて仮組立完了
再度、組外して漆工事になります。

竹林寺様の本堂も完成し、これから境内整備工事を行っていくところです。今回、本堂とともに須弥壇も新調することになり、弊社の宮大工の社員が製作させていただきました。新調した須弥壇は総ケヤキ造りすり漆仕上で、巾九尺（二・七m）・高さ三・三尺（一m）になり、禅宗様式の三間造りになります。そしてひな壇がつき、後ろの両側には組込み階段がつきます。使用したケヤキは弊社の豊富な在庫より、吟味して選んだもので、長年在庫として保管し乾燥させていたものです。

閑田寺様上棟式

六月十八日には閑田寺様（湖西市・曹洞宗）で書院・庫裡の上棟式を行いました。旧書院と庫裡は老朽化が著しく、耐震強度の不足はもろんのこと、建物の傾き、雨漏り、各所の痛みがひどく、檀信徒の方が使用するのも不安な状態でした。昨年よりどのような間取りにするかなどの打ち合わせをし、今月の上棟式にいたしました。当日はあいにくの曇り空でしたが暑すぎず上棟式を無事に終えることができました。上棟式後の餅投げではタオルや軍手もまかれました。



大玄関を備えた書院・庫裡は1棟に含めたため、大きな建物です。

「供養ビジネス」

日本テンプルヴァン(株)井上拓郎

「お坊さん便の未来」

四月は、企業に新しい社員が入社し、学生は新年度を迎え、宗教界でも会計年度が三月末締の場合、新しい年度の始まりでもあります。そんな中、以前お伝え致しました「お坊さん便」という法事などに僧侶派遣のサービスを提供する、「株式会社みんなび」が、総額一〇億円の資金調達を実施したとのプレスリリースをおこないました。

このみんればは、ネット通販大手のアマゾンに僧侶派遣を商品として出品した会社です。(詳しくは「心ゆたかに」二二二号」をご覧ください)

この資金調達は、葬儀に関する情報の少なさ、宗教界のIT化の遅れ、宗教心の希薄化などを要因とした旧態依然とした葬儀ビジネスにおいて、葬儀ベンチャーとしての事業拡大をおこなう為の資金調達のようです。東京では、菩提寺を持たない世帯が六〇七割いると言われておりますが、こういった、初めて葬儀を依頼する世帯をターゲットにした葬儀受注のビジネスモデルなのだと思います。

一昔前、または地域によっては、家族の誰かが亡くなれば、菩提寺か親族の年長者

に相談することが一般的でした。しかし、IT化(情報化社会)が進んだ現代においては、先ず「ネットで検索する」といった方が、大多数なのが現実です。また残念ながら、ネットの情報が必ずしも正しく無いのも事実です。皆さんのお寺でも、お布施などについて事前に調べて、ネットの情報を鵜呑みにされるお檀家さんはおられますか? 「うちのお寺に限ってはそんな事はない」と言われるご寺院は、寺檀関係が良好なのだと思えます。引き続き良好な寺檀関係を維持していただければと思います。

葬儀、及び周辺市場と合わせますと、四兆円の市場規模と言われておりますが、このなかでお布施などの寺院の宗教活動に対する金額は、二割も満たないと思えます。

しかし間違いなくこの比率は、この先少なくなっていく傾向にあります。この先二〇四〇年ごろまでは死亡者人口の増加により、市場規模は拡大傾向にあると、メモリアル関連産業は見込んでおり、新規参入や事業拡大を目指していくと推測できます。お布施に関わる部分においても、僧侶派遣という形で、一般企業の参入が現実となってしまうている現代においては、宗教界対メモリアル関連産業とのせめぎ合いは避けては通れない道なのかもしれません。一寺院としては、資金力や慣習にとらわれ

ないこれらの企業に太刀打ちすることは、並大抵の事ではないと容易に想像ができません。

また同時に現代のニーズにマッチできていない宗教界があることも認識しなくてはいけないかもしれません。そのなかで「変えるべき事」と、「変えるべきではない事」を、よく見極める事が重要なのだと思えます。

「消費者のニーズ」

僧侶派遣という形で、お布施に関わる部分にまで、一般企業が開く時代になってしまいました。宗教行為に関わるお布施にまで営利企業が開くなど、もつてのほかかと思われる方が大半だとは思いますが、「お坊さん便」に登録している僧侶の数は七〇〇名いるそうです。このなかには、こういった僧侶派遣のサービスを肯定的に捉えている僧侶もおり、新しいビジネスチャンスと捉えている方も多数居るようです。

この現象は、一昔前であれば、業界内で異質と思われるかもしれませんが、利用する消費者の方々には、時代の変化と共に致し方ない認識を持たれているようです。しかし一方で、まだまだサービスの質を担保出来ていないとの声が散見されます。

金額ありきの供養ビジネスは、限界があるのかもしれませんが。

知って得する 盆踊りの話

夏になると各地で行われる盆踊り、今回はその盆踊りについて調べてみました。

日本大百科全書によると、盆に踊る民俗芸能。祖霊・精霊を慰め、死者の世界にふたたび送り返すことを主眼とし、村落共同体の老若男女が盆踊り唄の唄で集団で踊る。手踊り扇踊りなどあるが、歌は音頭取りがうたい、踊り手はやす。太鼓、それに三味線、笛が加わることもある。古く日本人は旧暦の正月の七月は他界のものが来臨するときと考えた。正月は「ホトホト」「カセドリ」(小正月の夜に家々を訪れて祝言を述べて回る年神に扮装した者)などいわゆる小正月の訪問者がこの世を祝福に訪れ、七月は祖霊が訪れるものとした。盆棚で祖霊を歓待したのち、無縁の祖霊にもすそ分けの施しをし、子孫やこの世の人とともに楽しく踊ってあの世に帰ってもらうのである。こうした日本古来の精霊観に、仏教の盂蘭盆会が習合してより強固な年中行事に成長した。盆に念仏踊りを踊る例もあるが、念仏踊りは死者の成仏祈願に主眼があり、一般に盆踊りとは別個の認識にたつ。(引用はここまで)

盆踊りの起源は平安時代までさかのぼります。その頃の僧侶空也は念仏を広めるために、瓢箪を手に持ってたたきながら節に合わせて念仏を唱え、念仏をあげようとしていたようです。そして念仏にあわせて踊りを踊るようになり広く世の中に知られるようになりました。鎌倉時代には一遍上人が全国に広めましたが、この時代には民俗芸能として庶民の間で定着し、娯楽的な意味合いが強くなり、江戸時代には盆踊りは各地域の人々の交流となり、男女の出会いの場となっていました。現在も各地で盆踊りが行われていますが、三大盆踊りと言われているものを紹介します。

まず秋田県羽後町「西馬音内(にしもない)の盆踊り」です。踊りの特徴は野性的なお囃子に上方風の優美な踊り。“亡者踊り”という別名がありますが、これは編み笠や、目の穴を開けたのみで頭からすっぽり被る黒い彦三頭巾(ひこさずきん)で顔を隠すからで、一方で、浴衣には艶やかな衣装を着ます。現在では国指定重要無形民俗文化財になっています。会期は毎年八月十六日から十八日に開かれています。

次に岐阜県に伝わる「郡上踊り」は、中世からの古い踊りの流れを汲みつつ、江戸時代頃から盆踊りとして始まったと言われています。その当時、「盆の四日間(はなまる)は身分の隔てなく無礼講で踊るがよい」と奨励したため、現在でも地元の人にはもちろん、観光客も一つの輪になって踊ることができなのが最大の魅力です。こちらも国指定重要無形民俗文化財にもなっています。

最後に今や日本を代表する盆踊りといってもいいほど有名で、「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊らにや損損」のフレーズでも有名な阿波踊りです。本場は四国の徳島で四百年以上の歴史があると考えられています。毎年八月十二日から十五日に開催されており、市の中心部の公園や通りなどが会場になっています。また東京の「高円寺阿波踊り」埼玉県の「南越谷阿波踊り」も毎年阿波踊りが行われていて大勢の観客が訪れています。

